

## 第14章 ハンガリーにおけるナショナリズムと言語

早稲田 みか

ナショナリズムと言語の関係をハンガリーの事例から考察する。ナショナリズムを構成する要素として、言語は必ずしも必須条件ではないが、多くの場合、とりわけヨーロッパにおいては、言語がナショナリズムの原動力となっている。ハンガリーでも、言語を民族のアイデンティティーのよりどころとする考え方が一般化し、現在でも言語を護るという意識がきわめて強い。本稿では、ハンガリー語がハンガリー民族の独自性の象徴としてとらえられるようになり、民衆語から国家の言語になっていく過程を概観して、言語と民族のむすびつきがいつどのように形成されたのかを探る。さらに、現在の民族問題や外国語教育にもふれ、ヨーロッパの統合がすすみ、地球規模のグローバル化がすすむ現代においては、均質性や効率性よりも多様性や越境性を尊重することの方が重要であることを指摘する。

### 1. はじめに

「国民はその言語のなかに生きている Nyelvében él a nemzet」というセーチェーニ・イシュトヴァーン (1791-1860) の有名な言葉ほど、ハンガリー人の言語観を象徴的に表現しているものはないだろう。ハンガリー語について語る際に繰り返し好んで引用されるこの表現には、ハンガリー人が自らの言語にたいしてもつ熱い思いがこめられている。

ハンガリー語こそがハンガリー国民であることの唯一のよりどころであり、ハンガリー語のなかにこそハンガリー民族の独自性があるという思想、それゆえ民族存続のためにはハンガリー語を大切に保持・育成していかなければならないという主張、ハンガリーにおいて現在一般的になっているこうした考え方は、いつどのようにして形成されたのだろうか。

ハンガリー語は、言語の系統からいうと、周辺で話されているドイツ語やスロヴァキア語、スロヴェニア語、クロアチア語、セルビア語、ウクライナ語、ルーマニア語などとはまったく異なるウラル語族に属する言語である。同じインド・ヨーロッパ語族に属し、互いに似かよった言語を話している周辺民族のなかにあつて、ハンガリー語は文法構造も語彙もそれらとはまったく異った様相を呈している。これは、ハンガリー語を話していた人々の祖先が、9世紀末にヨーロッパにやってきた異民族であることに起因している。こうした特異な出自は、ハンガリー思想史において、ときに劣等感となり、ときに優越感となって表面化するのであるが、ハンガリー人の民族意識と言語観を考える上で、もっとも重要な要素のひとつであると考えら

れる。

また、歴史的にみると、ヨーロッパに侵入した多くの異民族が周囲の民族に同化して、元来の言語を失っていったのにたいして、ハンガリー人たちはその言語を保持したまま現在に至っている。9世紀末にヨーロッパにやってきた後のハンガリー人の歴史は、波乱に富んでいる。モンゴル族の来襲、オスマン・トルコによる支配、オーストリア・ハプスブルク家による支配など、常に大国に圧迫され虐げられてきたという被害者意識が強く、自分たちの民族と言語がいつ滅びるかもしれないという強迫観念をもちつづけてきたという歴史をハンガリー人はもっている。このような歴史意識も、ハンガリー人の民族意識を強固なものにしている要因といえる。

実際、ハンガリー語にはいずれこの世から消滅するだろうと死の宣言を下されたことがあったのである。ドイツの思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）は、『人類史の哲学的考察』*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* IV. (1791) のなかで、ハンガリー人はいずれその言語ともどもこの地上から消え失せる運命にあるとのべた。「ハンガリー人は、住民のなかでもとるに足らぬ存在で、スロヴァキア人、ドイツ人、ルーマニア人などに囲まれて、かれらの言葉はおそらく数世紀のちにはこの地上でほとんど聞かれることはなくなるであろう。」

ヘルダーのこのおどろくべき予言はハンガリーの知識人たちに大きな衝撃と刺激を与えた。のちに触れるように、この時期はハンガリー語の近代化運動が始まった頃でもあった。ヘルダーは、わずか2年後の1793年に刊行された『人間性促進のための書簡』*Briefe zur Beförderung der Humanität* 第1巻では、前言を撤回することになった<sup>(1)</sup>。

このヘルダーこそ、中東欧のナショナリズムに多大な影響を与えた人物とってよいのであるが、次にそこに至るまでのハンガリーの言語状況を歴史をおって概観しておこう。

## 2. ハンガリー語が民衆の言語から国家の言語となるまで

ハンガリーの初代の王イシュトバーンが1000年にキリスト教を受容したことから、中世のハンガリーにおいては、ヨーロッパ全域においてそうだったように、ラテン語が支配者層の言葉、宮廷や教会や学問の言葉となった。これにたいし、ハンガリー語は民衆の言葉、土着の言葉であった。それがやがて、16世紀になると、宗教改革や人文主義、印刷技術の発展などの影響で、しだいに人々の目がハンガリー語に向けられるようになる。聖書を民衆の言葉であるハンガリー語に翻訳する過程で、両者の言語構造や表現方法、語彙の違いが認識されるようになり、ハンガリー語にたいする言語学的関心が生じてきたのである。こうして16世紀中頃には、ハンガリー語の文法書や辞書がつくられるようになる<sup>(2)</sup>。

18世紀の啓蒙主義の時代になると、女帝マリア・テレジアの近衛兵だったベシェニエイ・ジェルジ（1747-1811）の言葉にみられるように、ハンガリーが後進国であることが強く意識され、それを克服するためには、ハンガリー語による文学や学問を発展させることが必要であると叫ばれるようになった<sup>(3)</sup>。ちょうどその頃、ヨーゼフ2世のドイツ化政策の一環として、

1784年に公用語がラテン語からドイツ語にかえられて、ハンガリーでは猛反発がおきた<sup>(4)</sup>。さらに、前述したヘルダーによるハンガリー語の滅亡宣言がなされたのが1791年。こうして、いやがうえでもハンガリー語への関心がたかまり、ハンガリー語を使用する権利、ハンガリー語の語彙や文法を豊かにして文学や学問の言語にふさわしい文語を創造しようという運動が盛り上がっていった。この運動は「言語革新 nyelvújítás」と呼ばれ、以後半世紀以上にわたり、その理論や方法論をめぐるさまざまな議論が繰り広げられた。

こうした流れの背景には、フランス革命思想とドイツ・ロマン主義の影響があったものと考えられる。自由・平等・博愛の精神を掲げたフランス革命は、言語の平等を「自由な国民のもとでは言語はひとつで、万人にたいしておなじでなければならない」と定義したのであった。こうして、ひとつの同じ言語を話す均質な国民からなる国民国家を理想的な政治形態とする思想が広まり、それが、いまだ独立国家をもたない中東欧の民族運動がめざすべき目標となった。このような意味で、中東欧におけるナショナリズムとは、ひとつの同じ言語を話す均質な国民からなる国民国家の創造をめざす運動であったと定義することができる。そして、ある民族が国民となりうる権利をもつことの証明たりうる民族の独自性を言語に求めたのが、ヘルダーに代表されるドイツ・ロマン主義だったのである。

ヘルダーによれば、あらゆる民族には固有の精神 *Volksgeist* があり、それは言語や民話、民謡、習慣などに宿っている。こうした考え方にもとづいて言語の重要性が認識され、言語は民族意識形成の必要条件となっていた。さらに、そのさいの言語は、けだかく汚染されていない農民の言葉、土着語、方言でなければならなかった。下層のことはをくずれて汚れたものとみなすフランスの言語観とはおよそ対照的であった。純粋な言葉を話す農民こそが、民族固有の精神の守り手であるという思想のもとに、文学においても農民の言語習慣や民謡がさかんにとりいれられた。農民の生活習慣や言語のなかに純粋なハンガリーらしさを求める考え方は、以降、現代にいたるまでさまざまな形で引き継がれていく<sup>(5)</sup>。

19世紀初頭の言語改革をめぐる論争においても、素朴な民衆の言葉に規範を求める正語派（オルトローグシュ）と、洗練された文体をめざし、民衆にたいする文学者の指導的役割を重視する新語派（ネオローグシュ）との間で、激しい論争がたたかわれている<sup>(6)</sup>。

こうして、民族のアイデンティティと言語とが離れがたく結びつき、ハンガリー語を話すことがハンガリー国民となることを意味するようになった。「国民はその言語のなかに生きている」という冒頭の言葉はまさにそのことを意味している。

ハンガリー大貴族の出身で政治家だったセーチェーニ・イシュトヴァーンは、自ら私財を投じて科学アカデミーを創設するなど、ハンガリー近代化の父とも称えられている人物であり、「もっとも偉大なハンガリー人」とまで呼ばれている。しかし、興味深いことに、この「もっとも偉大なハンガリー人」は、ハンガリーが話せなかった。つまり、セーチェーニはハンガリー語を母語として生まれたのではなかったのである。当時の大貴族の大多数がそうだったように、セーチェーニの母語はドイツ語であり、ハンガリー語は成人してから後に学習したものであった<sup>(7)</sup>。

「ハンガリーの人はハンガリー語を話す」という一見ごくあたりまえに思える命題は、当時

のハンガリーにはまったくあてはまらなかった。元来、ハンガリーは多民族地域であり、オーストリア帝国に属していた頃には、ドイツ人、スロヴァキア人、ルーマニア人、クロアチア人、ルテニア人、セルビア人、ジプシー、ユダヤ人など、さまざまな民族が共存して暮らしていた。民衆自身に確固たる民族意識はなかったし、またなかったからこそ共存できたのであろう。他方、支配者層である貴族たちには、ハンガリー人であるという意識はあったが、言語の方は主にドイツ語やフランス語を話していた。つまり、ハンガリー人であるというアイデンティティーとハンガリー語を話すということは、けっして結びついていなかったのである。

終生、日記のほとんどをドイツ語で書いたセーチェーニは、ハンガリー語による著作のなかで、次のようにも書いている。「われわれの言葉（ハンガリー語）は、男らしい力にあふれている。…ハンガリー人にふりかかる幾多の災難のなかで他民族に同化することがなかったのは、この言葉の力によるものだ」（*Hitel*: 1828）。ここからは、セーチェーニにとって、ハンガリー語はハンガリー民族のアイデンティティーを構成する重要な要素であり、ハンガリー民族の存続を維持するものとしてとらえられていることが読みとれる。

以後、19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、民衆のあいだにもハンガリー語化が急速に進んでいき、現在のハンガリーは、国民の大多数がハンガリー語を話すハンガリー人からなる国家となっている。これは、ハンガリー語への同化政策がとられ、ハンガリー国内の少数民族を抑圧する数々の教育法が施行された結果でもあるが、最終的には、二つの世界大戦ののちの国境の再編成（ハンガリーは国土の3分の2を失った）によってもたらされた皮肉な結果といえる。他方、ハンガリーの周辺諸国には、多くのハンガリー人が少数民族としてとり残されることとなり、いまだに解決されていない民族問題を派生することになった。

### 3. 現在の言語状況

1990年の統計によれば、ハンガリーの総人口（1045万人）のほぼ96.6%がハンガリー人である。残りの3.4%を構成するハンガリー国内の少数民族には、ロマ（ジプシー）（50-60万人）、ドイツ人（20-22万人）、スロヴァキア人（11万人）、クロアチア人（8万人）、ルーマニア人（2万5千人）、セルビア人（5千人）、スロヴェニア人（5千人）、ブルガリア人、ギリシア人、ポーランド人、アルメニア、ウクライナ人などがいる<sup>(8)</sup>。

彼らの多くはロマをのぞいてハンガリー社会に同化しており、深刻な民族問題は少なくとも表面的には存在しないといってよい。

したがって、ハンガリーの民族問題といういい方をするときには、ハンガリー以外の国で暮らしているハンガリー人の問題をさすことが多い。第一次世界大戦で敗戦国になったハンガリーは、国土の3分の2を周辺諸国に割譲し、人口の3分の1がハンガリーの国境外に取り残される結果となった。このため、現在では、ルーマニアに約200万人、スロヴァキアに約60万人、ウクライナに約20万、クロアチアに約3万人、セルビアに約40万人、オーストリアに約5千人のハンガリー人が暮らしているといわれている<sup>(9)</sup>。ハンガリー人がヨーロッパ最大の少数民族（350万）であるといわれることがあるのは、そうした状況をさしているのである。

このような国外のハンガリー人の多くは2言語使用をやむなくされており、母語であるハンガリー語の使用の権利をめぐる、いくつもの問題をかかえている。

例えば、スロヴァキアには、1991年の調査によると、およそ60万人（全人口の11.5%）のハンガリー人が暮らしているが、近年のスロヴァキア政府による過激なナショナリズムはハンガリー人の状況をますます不安定なものにしている。

そのよい例が1995年11月15日に可決され、1996年1月1日から施行された「言語法」である。その前文では、「スロヴァキア語はスロヴァキア国民の独自性のもっとも重要な指標、もっとも貴重な文化的遺産である」とうたわれており、さらに第1条では、「スロヴァキア共和国国内では、スロヴァキア語が国家の言語であり、他の言語よりも優位にたつ」と規定している<sup>(10)</sup>。

この前文からは、「スロヴァキア国民はスロヴァキア語を話す」という、言語と民族を一体化する中東欧に典型的なナショナリズムが読みとれる。スロヴァキア語の優位性を定めているのは、チェコ語やハンガリー語の使用を念頭においたうえでの判断と思われる。

当然のことながら、ハンガリー系住民は、ハンガリー語の使用や教育の面でなんらかの制限がなされる可能性があるとして猛反発した。また、ハンガリー国内においてもこの言語法は大きな波紋をまきおこした。とりわけハンガリーのナショナリストたちは、スロヴァキア国民の1割をしめるハンガリー系住民をスロヴァキア化して、スロヴァキア人だけからなる国民国家を形成しようという意図がその背後にあるとして、痛烈な批判をあげた。

たしかに、民族的に均質な国民に基盤をおく国民国家の思想は、ヨーロッパ連合という新しい形の地域統合がめざされている現代においては、時代錯誤といわざるをえないし、国民国家思想にこだわっている限り、現在の民族問題が解決しないことはあきらかである。

ここで、共存のためのあらたな枠組みを構築し、少数民族問題を解決していくうえで、EUの果たす役割に注目しておきたい。現実には、EUの少数民族言語政策は、中東欧諸国の民族問題の歯止めとなっている。というのも、EU参加を希望している旧東欧諸国にたいして、EUは適切な少数民族政策がとられていることを加盟の条件に加えているからである<sup>(11)</sup>。

ハンガリーについていえば、ハンガリー憲法は、少数民族の存在を認め、政治への集団参加権、母語の使用、母語で教育を受ける権利を認めている。また、教育法は、少数民族に属する子弟は、母語による教育、あるいは、母語とハンガリー語による教育を選択できると定めている<sup>(12)</sup>。少数民族の割合が圧倒的に少ない現在のハンガリーだからこそ、少数民族の権利を大幅に認めて民主的な少数民族政策をとることが比較的容易な状況にあるといえるかもしれない。

ところで、ヨーロッパ統合という観点からみると、このような少数民族のかかえる言語問題のほかに、意志疎通のための共通言語に関する問題や外国語教育の問題がある。

#### 4. ハンガリーの外国語教育

ハンガリーは1989年に、それまでの共産党による一党支配の体制から、複数政党制の民主国家へと体制転換をとげた。こうした体制の変化は、ハンガリーの言語教育にも大きな変化を

もたらした。西側諸国との往来が完全に自由になり、多くの西側企業が進出してくるなかで、外国語、とりわけドイツ語や英語の必要性が認識されるようになり、外国語学習熱が高まっている。

ハンガリー社会が国際化することにより、コミュニケーションの手段としての外国語の習得が必要とされるようになってきた。なかでも、隣国オーストリアとヨーロッパ最大の経済力をもつドイツの言葉であるドイツ語と、世界共通語ともいわれる英語の人気の高い。

ハンガリーにおける外国語教育にかんしていえば、第二次世界大戦以前にはドイツ語、フランス語、英語、イタリア語などが教えられていた。第二次世界大戦後、ハンガリーがソビエト連邦の支配下にはいると、ロシア語が義務教育に導入される。ロシア語は社会主義諸国のリンガ・フランカとして、1949年から1989年まで、すべての教育機関において義務教育であった。誰もが初等教育の8年間、1982年からは9年間、ロシア語を学ばなければならなかった。しかし、1985年のデータではロシア語が話せるのはたったの3.9%だけで<sup>(13)</sup>、この数字だけからみれば、ハンガリーにおけるロシア語教育はまったく成果をあげなかったといえる。ロシア語ができるのに、できるとはいいたくないという心理がはたらいていることもありそうだが、いずれにせよ、この背景には、ソヴィエトの政治的圧力にたいする反感や、言語的にも文化的にも宗教的にも、ハンガリーとロシアの結びつきが弱かったことなどが考えられる。

1989年の体制転換にともない、ロシア語は義務教育からはずされ、多くのロシア語教師が職を失った。ロシア語にかかわって教えられるようになったのが、英語とドイツ語である<sup>(14)</sup>。例えば、1988-89年度においては、何らかの外国語を学ぶ生徒のなかで英語を学んでいたのは、小学校では3%、中等学校では16.5%だった。それが1992-93年度においては、小学校で32.3%、中等学校では38.0%に増加している<sup>(15)</sup>。

小学校でもっとも多く生徒が学んでいるのはドイツ語(45.5%)である。中等学校では英語(38.0%)であり、ドイツ語は2番目(29.2%)に多い。1993-94年度においては、教育機関で教えられている外国語の授業のなかでは英語(27.4%)がもっとも多く、ついでドイツ語(23.0%)となっている。

学問の領域、とくに、自然科学の分野で英語がいやおうなく共通語になっている状況はハンガリーでも変わらない。メツェシュとカプランによれば、とりわけ科学技術の分野における英語の圧倒的優位性は明らかである。英語を通してでなければ、最新の科学的情報が得られない状況にあっては、英語ができなければ研究はできないに等しい<sup>(16)</sup>。

また、一般の職業にかんしても、最近の多くの外資系の企業においては外国語の能力が要求される。いまや外国語の知識は社会的に成功する手段のひとつになりつつあるといってよいだろう。こうした傾向はハンガリーがEU加盟をめざしていることから、さらに拍車がかかるものと思われる。

ただ、多少日本と異なるところは、外国語教育の対象が必ずしも英語一辺倒ではないことである。小学校においても、英語やドイツ語のほかに、フランス語やイタリア語、ロシア語、スペイン語、日本語などが教えられていることからわかるように、外国語の選択にはかなりの幅がある。これは健全な方向として評価できよう。

## 5. おわりに

以上、ごく簡略ながら、ハンガリーでは近代的国民国家創設の手段として、言語が民族のアイデンティティーと強固にむすびつき、ナショナリズムの象徴として利用されたことをみた。多様性を認めないナショナリズム、いわば言語民族主義ともいえる中東欧諸国に典型的にみられるナショナリズムは、ソヴィエト連邦の支配から解放された旧東欧諸国にはいまだに根強く残っており、新たな民族問題を引き起こしている。

他方、国家や民族をこえたゆるやかな共同体をめざしている西ヨーロッパにおいては、「文化的多様性」が強調され、少数民族やその言語の擁護運動が盛んである。たしかに多言語状況のなかでこそ、それぞれの言語の差異や類似性が認識され、それによっていっそう、個々の言語の豊かさや大切さが理解されるのである。

外国語教育においても、英語だけでなく、複数の言語を選択できるようにすることが大切であろう。国際的機関や組織においては、不経済で非効率のかもしれないが、それでもなお、共通語をひとつに定める必要性は必ずしもないのではなかろうか。

言語にかかわるあらゆる面で、均質性や効率性を重視する方向から、多様性や越境性を認め尊重する方向への転換が今後ますます必要になっていくものと思われる。

## 注

- (1) ヘルダーの予言については、ジョンストン (1986, 577) および Wolff (1994, 312) を参照。
- (2) たとえば、シルヴェステル・ヤーノシュの *Gramatica Hungarolatina* (1539) は、ラテン語の文法を記述したものであるが、ハンガリー語との比較もおこなっているため、ハンガリー語についての最初の記述といえることができる。
- (3) 啓蒙期のハンガリーについては、Kosáry (1987) を参照。
- (4) この後、再びラテン語が公用語になり、1844年によくハンガリー語が公用語になる。ヨーゼフ二世の改革については、矢田 (1977, 29-32) を参照。
- (5) たとえば、1930年代、真のハンガリー精神は都市よりも農民の生活のなかにあるとして、農村に出かけて行って、彼らの生活や状況を描こうとした作家たちの運動があった。ハンガリー文学全般については、Czigány (1984) を参照。
- (6) 言語改革を含めた、ハンガリー語の歴史については、Bárczi (1975) を参照。
- (7) Szabó (1994, 119-135).
- (8) *Fact Sheets on Hungary* (1992).
- (9) *Fact Sheets on Hungary* (1991).
- (10) Minority Protection Association (1996, 7).
- (11) 梶田 (1993 a, 1993 b) を参照。
- (12) ハンガリーの少数民族政策については Samu (1995)、Szépe (1994) を参照。
- (13) Radnai (1994, 70).
- (14) サボー・イシュトヴァーンの映画『可愛いエンマ、愛しいベーベ』(Édes Emma, drága Bóbe) (1993年)には、職を失ったロシア語教師が急ごしらえの英語教師に転身する悲喜劇が描かれており、観客であるブタベスト市民の失笑を買っていた。
- (15) Radnai (1994, 86).

(16) Medgyes and Kaplan (1992, 69).

#### 参 考 文 献

- 梶田孝道、1993 a 『新しい民族問題——EC 統合とエスニシティ』中央公論社。
- 梶田孝道、1993 b 『統合と分裂のヨーロッパ——EC・国家・民族』岩波書店。
- ジョンストン、W. M., 1986 『ウィーン精神——ハプスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』2。井上修一他訳。みすず書房。
- 矢田俊隆、1977 『ハプスブルク帝国史研究』岩波書店。
- Ács, Zoltán. 1986. *Nemzetiségek a történelmi Magyarországon*. Budapest: Kossuth Könyvkiadó.
- Bárczi, Géza. 1975. *A magyar nyelv életrajza*. Budapest: Gondolat.
- Brunner, George. 1994. Nation-States and Minorities in the Eastern Part of Europe. In Fejős. 1994. 5-38.
- Czigány, Lóránt. 1984. *The Oxford History of Hungarian Literature*. Oxford: Clarendon Press.
- Fact Sheets on Hungary*. 1991. 9. *National and Ethnic Minorities in Hungary*. Budapest: Ministry of Foreign Affairs.
- Fact Sheets on Hungary*. 1992. 5. *Hungary and its People*. Budapest: Ministry of Foreign Affairs.
- Fejős, Zoltán. 1994. *Regio. A Review of Minority and Ethnic Studies*. Budapest: Teleki Foundation.
- Jakabffy, Imre. 1994. *Magyarázat közép-európa nemzetiségi térképéhez 1942*. Budapest: Teleki László Alapítvány.
- Kontra, Miklós. 1991. *Tanulmányok a határainkon túli kétnyelvűségről*. Budapest: Magyarágkutató Intézet.
- Kosáry, Domokos. 1987. *Culture and Society in Eighteenth-Century Hungary*. Budapest: Corvina.
- Lanstyák, István. 1991. A szlovák nyelv árnyékában (A magyar nyelv helyzete Csehszlovákiában 1918-1991). In Kontra. 1991. 11-72.
- Medgyes, P. and Robert B. Kaplan. 1992. Discourse in a foreign language: the example of Hungarian scholars. *International Journal of the Sociology of Language*. 98. 67-100.
- Minority Protection Association. 1996. *The Slovak State Language Law and the Minorities*. Budapest: Kossuth Publishing and Trading Company.
- Popély, Gyula. 1995. Néhány gondolat a felvidéki magyarság helyzetéről. *Valóság*. 9. 76-89.
- Radnai, Zsófia. 1994. The Educational Effects of Language Policy. In Wright. 1994. 41-64.
- Réti, György. 1995. Hungary and the Problem of National Minorities. *The Hungarian Quarterly*. No. 139. 70-77.
- Samu, Mihály. 1995. *A magyar kisebbségi törvény*. Budapest: Püski.
- Szabó, Árpád. 1994. *Magyarság*. Budapest: Societas Philosophia Classica.
- Szarka, László. 1994. The Slovak National Question and Hungarian Nationality Policy Before 1918. *The Hungarian Quarterly*. No. 136. 98-113.
- Szépe, György. 1994. Central and Eastern European Language Policies in Transition (With Special Reference to Hungary). In Wright. 1994. 41-64.
- Vadkerty, Katalin. 1994. Hungarians in postwar Slovakia. *The Hungarian Quarterly*. No. 136. 115-127.
- Wolff, Larry. 1994. *Inventing Eastern Europe*. Stanford, California: Stanford U. P..
- Wright, Sue, ed. 1994. *Ethnicity in Eastern Europe, Questions of Migration, Language Rights and Education*. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.